



＜地球館地下3階 「宇宙を探る」コーナー＞

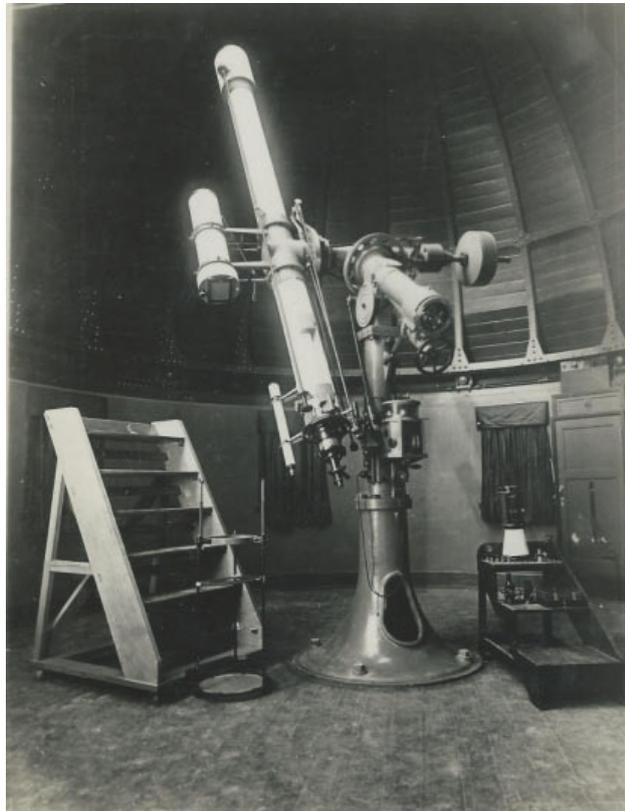
—歴史的望遠鏡（20cm屈折赤道儀）展示—

国立科学博物館（館長：林 良博）では、地球館地下3階展示室に1931（昭和6）年にわが国で初めて作られた本格的な屈折赤道儀を常設で展示いたします。この天体望遠鏡は、国立科学博物館（当時は東京科学博物館）の建物が上野に建てられた際に屋上の天文ドームに設置されたものであり、1931（昭和6）年暮れの観望公開開始から2005（平成17）年3月までの73年間、天体観望公開や太陽黒点の観測などに活躍してきたものです。また、1946（昭和21）年から1991（平成3）年の間には、9000枚にものぼる太陽黒点のスケッチ観測が行われ、とても貴重な記録となっています。

日本でもっとも長く、たくさんの人々に星を見せてきたこの望遠鏡は、日本光学工業株式会社（現：株式会社ニコン）が製作した日本で初めての本格的な天体望遠鏡で、科学技術史の上でも、当館の歴史を語る上でも非常に重要な資料のひとつです。

ちなみに、この望遠鏡は、日本画家太田聴雨の作品「星をみる女性」のなかで和装の女性が覗く天体望遠鏡のモデルになったとされ、後にこの絵画は記念切手にもなりました。

このたび当館において9年ぶりに常設展示として一般公開いたします。



昭和6年に設置された当時の20cm屈折赤道儀



現在の展示写真